

桜に忠義を尽くした地元俳人

桜川市が全国に誇れる数字がある。「55万」。単位は「本」。これでピンときたら同市の「顔」をよく知っている人だろう。市内の山に自生するヤマザクラ(以下山桜と表記)の数である。

この数は、同市が市内自然林に自生する山桜の推定本数を調べた結果、明らかになった。1haに約200本が自生していると推定し、天然林の面積約3,500haを掛けると、70万本となる。これを市は「控えめに推定して55万本」として公表した。

この本数からわかるように同市は、平安の昔から西の「吉野」(奈良県吉野郡吉野町)と並び、東の「桜川」として和歌や謡曲の題材となった。天曆5年(951)、村上天皇の下名で撰集を始めた『後撰和歌集』に載る紀貫之の歌は有名だ。「常よりも春べになればさくら河花の浪こそ間なく寄すらめ」とある。

能の世界でも「桜川」は知られている。日向国(宮崎県)の「桜子(児)」が家の窮乏を救うため自らを人買いに売る。身代金と別離の手紙が母

親に届くと、母親は悲しみのあまり半狂乱となり、桜子を探しに東国へ旅立つ。やがて常陸国磯部寺の稚児となっていた桜子は、桜川で子を思い桜の花びらを掬う母親と再会する。

謡曲「桜川」のあらすじである。室町時代の永享10年(1438)のことという。櫻川磯部稲村神社(同市磯部)の磯部祐行宮司は、鎌倉公方足利持氏に花見囃「桜見物語」一部を献上した。これが謡曲「桜川」誕生の契機となった、という。

江戸時代、桜川の桜は各地に移植された。しかし、明治維新前後から、成長が早く、絢爛豪華な「ソメイヨシノ」が全国に広まる。山桜は淡い赤や白色の自生種。桜川の山桜は、しだいに忘れられていった。

この現状を嘆き、桜川の山桜再興に立ち上がった青年がいた。西茨城郡西那珂村(桜川市)の俳人、石倉重継(1875-1938)である。旧笠間藩士、石倉又一の長男に生まれ、茨城県尋常中学校(現茨城県立水戸第一高等学校)を中退後、上京する。

石倉重継

Ishikura Shigetsugu

明治27年(1894)、重継は東京浅草に和歌の師、笠村良昌翁を訪ねた。そこで笠村翁から桜川古跡の現況を問われた。しかし、重継は答えられなかった。『岩瀬町史』はその時の翁の言葉をこう綴る。「和歌を研究しようとするほどの者が有名な花の名所で、郷里にある桜川の歴史の詳細について知らないのは何事か」と。

以後、重継は桜川事跡の調査・研究に没頭した。事績草案ができると、当代一流の学者の考証も受け、出版費用を生家から援助してもらい、明治28年(1895)、自著『桜川事蹟考』を出版した。

本の「自序」で重継は桜川の山桜を「その歴史に於て、その花値に於てその風致に於て決して吉野の後に屈するものに非ず」と指摘。そのうえで「東奔西走この考を編して桜川の怨恨を世に晴らさんとす」と思いのたけを吐露。「余は誠意花に忠ならんと期するものなり」と記す。

重継は『桜川事蹟考』を世に出した後も桜川山桜の顕揚に生涯をかけた。こうした重継の活動が実を結び、大正13年(1924)、桜川の山桜は、国指定の「名勝」となった。昭和49年(1974)には国の「天然記念物」にも指定された。

同市磯部、「磯部桜川公園」に重継の句碑がある。「桜魚掬わば花となりぬべし」。謡曲「桜川」の世界だ。桜子を求めて桜川に浮かぶ桜の花びらを掬う母親の姿が目浮かぶ。(文中敬称略)

主な参考文献

『桜川事蹟考』(明治28年、石倉重継著、幽調館発行)。
『岩瀬町史』(昭和62年、岩瀬町発行)。
『茨城の史跡は語る』(平成元年、茨城新聞社発行)。
新日本古典文学大系6『後撰和歌集』(平成2年、岩波書店発行)。



磯部桜川公園内に建つ国指定「名勝」の記念碑
=桜川市磯部(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「気付きの端緒」